

京極読書新聞 <第98号>

発行日 平成30年6月19日(火)
京極町生涯学習センター漢学館

「にっかり青江」と京極家 (前篇)

<『平家物語』を読む会> 村山 功一

『平家物語』とは関係ないのだが、東郷隆の『時代奇譚小説集』の中に、京極家に関わる興味深い物語がある。京極家の守り刀として代々伝わる「にっかり青江」という奇妙な名を持つ刀の話だ。

この小説集は標題が示すように“奇譚”、つまり怪異談である。だから作品中には、幻術使いや妖怪や幽霊が登場し、様々な怪異・超常現象が描かれている。もちろん現実とは思われないが、様々な時代に全国各地において、こうした怪異や霊威に関する伝説が語り継がれてきたことは確かであろう。

さて、小説 [にっかり] のあらすじを簡単にまとめてみよう。

享保年間(1700年代)のある夏の日、旗本の石川某という人の屋敷で家臣の若侍が集まって刀剣談義に花を咲かせていた。話が「にっかり」に及んだが、その由来について誰も知らなかった。たまたま来合わせた主人の石川が「それでは」と、生き字引と噂される義観という老僧(ちょっと怪しい人物なのだが)を呼び寄せて話を聞くことになった。

やって来た義観の語るところによると、この刀は代々京極家の守り刀として伝えられ、8代将軍吉宗は享保17

(1732)年、丸亀京極家江戸上屋敷を訪れこの刀を見物したという。(ちなみにこの時の丸亀藩主は4代目京極高矩である)そして今も京極家にあると語った……というのが、この小説の大きな流れである。もちろん小説ではこの刀が京極家に伝わった経緯や、“にっかり”という名の由来が詳しく述べられているが省略する。

私たちに馴染み深い丸亀京極家に関わるのであれば、是非とも詳しく知りたいと思い調べたところ、確かに「にっかり青江」という刀は現存していた。ただし、今は京極家の所有ではなく、丸亀市立資料館が所蔵している(通常は非公開)。

こうして「にっかり青江」の存在が明らかになったわけだが、その伝承において資料館の説明と東郷作品との間に様々な相違があるので整理してみた。



脇差 「にっかり青江」

項 目	丸亀市立資料館	東 郷 作 品
①製作年代	南北朝（1318～1392）時代	承元元(1207)年～承久3(1221)年の間
②刀匠名	青江貞次（中青江？）	青江貞次（古青江？）
③「にっかり」の意味	にっこり笑う女の幽霊を斬ったという伝説	にっこり笑う不動明王像、母親に化けた妖怪を斬ったから
④幽霊・妖怪を斬った人物	浅野長政の家臣 中島修理太夫・九里太夫兄弟 六角義賢の家臣・狛丹後守	浅野長政の若党（半助） (他説として) 浅野家の足軽が化地蔵を斬る 中島家の庶子が石灯籠の妖怪を斬る 宇喜多家の家臣が笑う火を斬る
⑤京極家に至る経緯	上記の人物（誰かは不明）→柴田勝家→勝敏→丹羽長秀→豊臣秀吉→秀頼→大阪冬の陣（慶長19=1614）和睦の礼として→京極忠高→以後代々丸亀藩主京極家に伝えられる	御番鍛冶の青江貞次から後鳥羽上皇へ献納 承久の乱敗北後、上皇はこの刀を近江国栗田郡脇山の日吉社に奉納。以後350年間この社にあった 土豪の子半助この刀を盗み出す→豊臣秀吉に所望され献上→秀吉関白就任（天正13=1583）の際、供奉した侍従京極高次に与えられた→（丸亀京極家）
	江戸時代、刀剣鑑定家本阿弥家の鑑定により「無代(値が付けられないほどの極上品)」とされた 昭和15(1940)年重要美術品に認定→国内を転々とし所在不明となる→東京・銀座の刀剣店で発見→平成9(1997)年丸亀市が購入、現在に至る	(他説として) 京極家の祖佐々木家に仕えていた駒丹後守→柴田勝家→勝久→丹羽長秀→長重→豊臣秀吉

次にそれぞれの項目について検討してみる。なお、丸亀市立資料館を（丸）、東郷作品を（東）と記す。

①作成年代は（丸）が南北朝時代とし、（東）は承元元年から承久3（「承久の乱」）までの間としている。

②刀匠は（丸）（東）ともに青江貞次としている。だが、これは果たして同一人物なのだろうか。というのは、（東）によると後鳥羽上皇（安徳帝の異母弟。のち「承久の乱」を起し敗北、流刑となる）により名誉ある“御番鍛冶”を拝命した貞次は、承元元年より毎年2月に鍛刀（刀を作る作業）を行ったという。事実とすれば、この時点で貞次はすでに成人に達しており、かつ名工に数えられていたと思われる。すると（丸）が示す南北朝の頃には百歳を超えていることになる。同一人物とするとかなり不自然である。

備中国（現岡山県）の刀工集団青江派は、平安末期から鎌倉中期までを〈古青江〉、鎌倉末期から南北朝期を〈中青江〉と称している。『日本刀剣図鑑』（得能一男／光芸出版）によると、貞次の名は鎌倉初期の〈古青江〉の中に見られるが中期の〈古青江〉、〈中青江〉となる末期にもその名は見えず、南北朝期の〈中青江〉に再び貞次が登場する。この空白期間が同一人物でないことを示しているのではないだろうか。おそらく（丸）の貞次は先代貞次を襲名した子である可能性が高い。あるいは貞次銘を許された弟子かもしれない。刀剣の銘は一種のブランド名という側面もあるから、

必ずしも一人の人物の作とは限らない。「にっかり青江」もまた、数ある“青江貞次ブランド”のひとつと考えるべきかもしれない。

③「にっかり」という名の由来は、多少の違いはあるものの「にっこり」と笑う変化の物（化け物）をこの刀で斬り捨てたという点で一致している。化け物の正体がいずれも石灯籠であったり、五輪塔であったり、化け地蔵といった普通には斬れそうもない石造物を真っ二つに斬り割って、折れもせず刃こぼれさえしなかったという点も、ほぼ一致している。

④化け物を斬った人物を、（東）は武士になりたくて日吉社からこの刀を盗み出して逃亡した半助という若者としているが、他説として3人の名を挙げている。そのうち二人は（丸）とほぼ一致しており、（丸）の六角義賢の家臣狛丹後守、（東）が宇喜田秀家の家臣としている点が相違する。なお、六角家も京極家と同じく近江源氏佐々木一族を祖としている。狛丹後守について（東）は駒丹後守と表記し、佐々木家に仕えた人物とする。

⑤で問題になるのはこの刀を京極家に与えた人物は誰か、拝受した人物は誰かということである。（丸）では秀吉の死後それを相続した秀頼から若狭小浜藩主京極家2代目忠高に与えられたとし（東）は豊臣秀吉から若狭小浜藩主京極家初代高次に与えられたとする。約30年程の時間差はあるものの、豊臣家から京極家へというルートは一致している。なお、京極家は忠高に継子がなかったた

め領地没収、断絶となったが甥の高和が再興し丸亀藩主初代となった。それに伴って「にっかり青江」も丸亀京極家の所有となったのだろう。そして代々伝えられ、（東）によると享保17年8代将軍吉宗が丸亀京極家江戸上屋敷でこれを実見したとし、（丸）は江戸時代（何時かは示されない）本阿弥家の鑑定により「無代」とされたとしている。（東）ここで終わるので享保以後については書かれていない。

さらに（丸）によると昭和15年に重要美術品に認定されたとあるから、私たちの京極町の礎を築いた高德にも受け継がれていたことは確かだろう。高德もまたこの伝説の刀を崇敬しつつ眺めたのだろうか。しかし重要美術品認定直後からその行方が分からなくなったという。代々受け継がれてきた守り刀がなぜ京極家を離れたのか。それについての説明はないが、時代から考えて戦時下という騒然とした世情、それに伴う混乱に関係するのかもしれない。そして平成9（1997）年、東京銀座の刀剣店にあることを知った丸亀市立資料館がこれを購入して現在に至っている。「にっかり青

江」は57年の歳月を経て、再び故郷丸亀に帰ってきたのである。ふと、これもこの刀が持つ霊威のなせる業か…と、思ってみたくなる。（後篇につづく）



丸亀藩京極家初代藩主 京極高和

《参考》

- ・『東郷隆 時代奇譚小説集』（縄田一男・編／白泉社）
- ・「丸亀京極家一名門大名の江戸時代（一部）」（香川ミュージアム）
- ・丸亀市立資料館資料（抜粋）
- ・『日本刀図鑑』（得能一男・著／光芸出版）湧学館蔵75 6. 6トク
- ・『日本史諸家系図人名辞典』（小和田哲男・監修／講談社）湧学館蔵 R228.2二木

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>

